

学際的なキャンパスで、経営を深耕、探索する

こしきまきさひろ

総合政策学部 准教授

経営戦略、国際経営、アントレプレナーシップの三軸から幅広く経営を研究、実践します。理論は厳密に、実践は現場を重視し、最先端、最前線の経営を身に付けます。

琴坂研究会は、IBER-KOTOSAKAと表記します。初代の学部生メンバーと考えたこの名称は、International Business & Entrepreneurship Research が語源です。日本語話者主体のB1（定員15名）と英語話者主体のB2（定員15名）から構成される学部の研究会は、まるで動物園のように多様性をもった個性豊かで可能性のあるメンバーで構成されています。また、

特任教員、研究員、博士・修士の学生（現在10名）がより深く厳密な経営学の国際的な研究を目指しています。

学際的な研究と実践に根差したSFC（湘南藤沢キャンパス）において、経営学の研究会がどうあるべきか。その私なりの答えは、大学院メンバーが国際的に認められる水準の研究を推進する一方で、学部においては可能な限り幅広く門戸を広げ、多彩な分野を探求する個性豊かな学部生が所属できる研究会とする現在の形でした。

教員が一方的に教える形を取らず、自主性を重視した探索的な調査研究を

奨励しています。学生の自治を尊重しつつ、学生の希望に基づいてゲストを招聘し、また企業と連携プロジェクトを発足するなど、多彩な学びの機会を提供することに努めています。

その結果、世界でも最高峰の国際学会に教員に交じって研究発表をする学生もいれば、日本を代表する企業の部長の方々と同じ目線で経営レベルの課題への提言に取り組む学生もおり、かたや数千万円単位の資金を調達し、事業開発に没頭する学生もいる強力な研究会に成長しています。

何よりも、学生間での日々の討議、学びが成長の基盤です。そのうえで、私はより高い視座を提供することに努め、最先端の理論、関連する文献を紹介し、最前線の経営で起きていることを伝えていきます。

近年では、卒業生を巻き込んだ学びの場も成長してきました。近い将来には、研究会の現役生と卒業生の共同研究や事業開発が多数生まれることを、心より楽しみにしています。

互いに10年後の戦友となる学舎

あさい 浅井 伶夫君 総合政策学部4年

琴坂研究会は、経営学を理論と実践の両面から捉えることで、近未来のあるべき経営について模索しています。毎週のゼミでは、経営戦略に関する古典的な理論や近年注目されている理論を扱う理論回、実際の企業ケーススタディに基づいたディスカッションを行うケース回を交互に開催しています。また、実務の最先端で活躍するゲストを招き、提言を行ったり、共同プロジェクトを進めたりすることで、ゼミでの学びと現実の接点を探っています。メンバーの特徴として、経営学を軸に多様な興味と経験を持つ学生が集っており、バックグラウンドや考えが異なるからこそ、互いに刺激し合える環境になっています。



義塾発の革新的創薬を目指して

おおさわまさのり

薬学部 教授

生命機能物理学講座（研究室）では、構造生物学とAIを融合させ、生体高分子の機能メカニズムに基づく革新的創薬を目指し、日々研究に取り組んでいます。

生命現象は、タンパク質や核酸といったさまざまな生体高分子がバランスよく機能することにより維持されています。そのバランスが崩れると病気になるります。薬は、特定の生体高分子に強く結合して、その機能を向上させたり抑制したりと適切に調節することによって、生体を異常な状態から正常な状態へと戻していきます。

薬とその標的となる生体高分子は、カギとカギ穴に例えられます。カギ穴にぴったり当てはまるカギにしか鍵を開けられないように、生体高分子表面にある「カギ穴」にぴったり当てはまる薬こそが、標的となる生体高分子に強く結合してその機能を調節することができ、副作用の少ない良い薬になります。

そこで私たちは、次の2分野を融合することにより革新的な新薬を創製しようとしています。1つ目は、疾病の原因となる生体高分子が、どのようなメカニズムでその機能を発揮するのか、そして薬が結合する「カギ穴」がどの

ような形・性質を有するのかを立体構造・運動性の観点から解明する「構造生物学」です。そして2つ目は、そのカギ穴にぴったり当てはまる薬の分子を、独自のAI技術・ケモインフォマ

ティクスを駆使して探索するインシリコ（II コンピュータを活用した）アプローチです。これらの2つの柱を融合することにより、実験だけでもない、コンピューターだけでもない、地に足つ

いた化合物探索研究を可能とし、さらには現場の医師や感染症・細胞生物学の専門家、そして化合物合成のエキスパートと共同研究を展開し、従来の方法では見いだせなかった化合物を創製していくようとしています。

講座の教員・学生ともに各自の研究テーマを持ち、各自が共同研究の一翼を担う責任感を持って研究に取り組んでいます。実験で汗をかき、ディスカッションでは脳みそに汗をかき、日々全力でぶつかり合ってお互いを高め、そんな雰囲気の中で

議論を通して養われる科学的思考力

えのもとしょうた
榎本翔太君 薬学研究科薬科学専攻修士課程1年

生命機能物理学講座では個性豊かなメンバーが活発に研究を進めています。この講座の一番の特徴は、教員陣と頻りにディスカッションを行えるところです。教員陣に実験結果を報告しに伺うと、結果に対する解釈や考察についての議論が起こります。そのため、ただ一つ一つの実験をこなしていくだけでなく、常にその結果を正確に理解し考察することが求められます。また、学生同士でも頻りに議論します。研究の進捗や成果を共有すると、メンバーからさまざまな質問や意見を受け取ることができ、新たな着想を得ることができます。このように、生命機能物理学講座は活発なディスカッションを通して科学的な思考力を養える環境です。

